

## 日本における女性のモノ化 (objectification)

### —女性への影響過程の検討—

森 川 華 帆

外見に関する他者からの評価や社会文化に根付く理想の女性像のプレッシャー、すなわち性的モノ化によって女性は自分自身を「他者に評価されるモノ」として捉えるようになる。これを自己モノ化といい、強く自己モノ化する女性は自分の身体に関して自分にとっての価値や機能ではなく、他者にとっての価値や魅力という視点に囚われ外見への強いこだわりを持つようになる。その結果、羞恥心の増強、不安感の増幅、身体内部感覚に対する気づきの低下など心理的影響を受ける。またこれらの経験が蓄積され複合的に作用することで、摂食障害症状、抑うつ症状などのメンタルヘルスリスクを伴うと考えられている (Fredrickson & Roberts, 1997; Fredrickson et al., 2011)。西洋を中心にこのモノ化理論の実証的研究が行われてきたが、日本社会における理論の包括的な研究はまだまだ少ない。

日本人の摂食障害患者は約25,000人と推定され、中でも10代後半に発症する女性が多い。また、うつ病等の気分障害患者は約130万人に上り女性患者数は男性の約1.6倍にも及ぶ。これら日本人女性の社会的問題である摂食障害や抑うつ症状の原因の一端を明らかにするため、本研究ではモノ化理論をもとに、性的モノ化経験が女性の自己モノ化を促進すること、自己モノ化は身体羞恥・身体不安の増大、身体内部感覚の低下を介して摂食障害傾向、抑うつ症状を高めることを仮説とした。

調査は女子大学生を対象とした研究1とクラウドソーシングを用いて20代前後の女性を対象とした研究2の2回実施した。分析の結果研究1研究2ともに、対人関係における性的モノ化経験から自己モノ化への回帰係数が有意に示された。すなわち性的モノ化経験は自己モノ化を促進するという仮説が支持された。続いて自己モノ化からの心理的・身体的な影響過程に関してパス解析を行ったところ、研究1研究2どちらのデータでも自己モノ化が摂食障害傾向を高めることが示された。また直接的な関係だけではなく自己モノ化が身体羞恥を媒介して摂食障害に影響を及ぼすという間接的な影響も明らかになった。したがって自己モノ化の影響過程に関しては、自己モノ化が身体羞恥を促進しその結果摂食障害傾向が増加するという仮説が支持された。

研究1のデータに限り、自己モノ化と摂食障害の関連において身体不安の間接的な影響が示唆されていることや、身体羞恥、身体不安、身体内部感覚と抑うつ症状との関連が示されていることを考慮すると、いずれの変数も無関係とは言えず理論の更なる検証が求められる。本研究と今後日本でのモノ化理論の発展が、人々の身体に対する意識改革と女性に対する不適切で望まれないモノ化の防止につながることを期待する。